

# 清代福建輸出茶葉の一集荷地・江西河口鎮の歴史と現況

松 浦 章

## 一 はじめに

十八世紀以降、清代中国の広州より欧米に向けて盛んに輸出されたものに茶葉があった。その主要な生産地の一箇所が、武夷山脈南側即ち福建省側の山麓であった。同地で生産された茶葉は、山越えで陸路により福建省から江西省へ輸送され、信江沿いの河口鎮から江西省内の水運、即ち信江を下り省都南昌方面に向かい、さらに南の広東省から北に向かって流れる贛江を遡航する水運を利用して江西省の南安府、現在の大余に至り、再び山越えで大庾嶺・梅関を経て広東省の南雄州、現在の南雄市に至って再度水運を利用して広州まで輸送されていた。<sup>1</sup>そして広州で外国船に積みかえられ海外に輸出されていたのであった。

清代において広州より欧米に向けて輸出された福建茶葉の集荷地の一所であった江西省河口鎮の地理的状況と現況及び、武夷山市より河口鎮までの道程は、かつての茶葉輸送経路の一端に該当するた

め、鉛山縣の河口鎮を訪れ実地調査したいと考え二〇〇一年八月二七日に第九屆国際明史学術討論会のために滞在した福建省の武夷山市より車をチャーターして江西省の鉛山縣にある河口鎮を訪れた。武夷茶葉の一集荷地である武夷山市星村より鉛山縣までは山越えの道路を經ておよそ一三kmほどあるが、山越えの道路であるため片道三時間ほど要した。<sup>2</sup>

そこで、清代および現在の河口鎮の状況等について、この時の実地調査の行程を含めて述べてみたい。

## 二 清代の河口鎮

江西省の河口鎮は清代において同省内の四大市鎮の一つとされる。<sup>3</sup>明治四〇年（一九〇七）の在長沙帝國領事館報告の「江西ノ商情」の「過去現在ノ商情」によれば、

乾隆以來天下昇平ニシテ各地ノ商情旺盛ヲ極メ、殊ニ江西ハ福建、広東、湖南、安徽ノ間ニ介在セルヲ以テ商況頗ル繁華ヲ呈

シ、所謂江西商人ノ基礎ヲ作レリ。当時ノ物産ハ景德鎮ノ磁器ヲ最トシ、吉安贛州ノ商人多クハ景德鎮ノ磁器ヲ鬻賣シテ家ヲ起セリ。各地ノ都市中景德鎮ヲ除クノ外ハ、臨江府ノ樟樹、南昌府ノ呉城ヲ較ヤ繁華ノ地ト為ス。

樟樹ハ吉安、南昌ノ中間ニ在リテ東撫州、建昌ニ連リ西瑞州、臨江、袁州ニ通セリ。呉城ハ揚子江ニ瀕シ、鄱陽湖ニ臨ミ邇上百八十清里ニシテ南昌ニ至リ、下ルコト百八十清里ニシテ湖口ニ至ル。凡ソ民船ノ南昌ヨリ下リ湖口ヨリ邇上スル者ハ必ス此地ヲ經過セザルベカラズ。故ニ貨物ノ広東ヨリ揚子江ニ運搬セラルル者ハ樟樹ニ集中シタル後、呉城ヨリ輸出セラレ、湖南、湖北、安徽、江蘇ヨリ揚子江ニ入ル貨物ハ呉城ニ集中シタルノ後、樟樹ニ至ツテ各販路ニ分配セラルルノ状態ナリキ。而シテ当時西洋雜貨ノ供給ハ皆広東ヨリ仰ギ、加フルニ漕折ノ制未ダ改メラズ、毎年米穀運送時期ニ至レハ樟樹、呉城ハ実ニ帆船江ヲ蔽フノ觀アリキ。

とあり、清代における江西省の有力な景德鎮や呉城、樟樹等の市鎮の繁栄の状況を概観している。

その四大市鎮とは世界的に有名な景德鎮磁器を生産した景德鎮が最初にあげられる。景德鎮は江西省の東北部に位置し、清代は饒州府浮梁縣に属していた。そして樟樹鎮がある。樟樹鎮について、江西巡撫郝碩の乾隆四十三年（一七七八）閏六月十七日付け奏摺において、「臨江府属清江縣所轄之樟樹鎮地方、實為水陸衝衢、商民雜

處、奸良莫辨、彈壓稽查、最關緊要。」とあり、水陸の交通至便の地であり多くの商民が集散する地であった。同地は江西省の省都南昌の南西部に位置し薬劑市場として有名であった。<sup>(6)</sup>清代は臨江府清江縣に属していた。さらに呉城鎮がある。呉城鎮についても江西巡撫海成の乾隆四十二年（一七七七）七月十六日付けの奏摺において「呉城鎮、五方雜處、商賈雲集、有彈壓地方、查拏匪竊之責、非強幹之員、不能為理。」<sup>(7)</sup>とあり、呉城鎮にも各地の商人が集まってくるため様々な事件が発生する可能性があるため、官員には強靱で処理能力に長けた人物が必要とされる地であった。同地は長江流域に連なる鄱陽湖の西に位置し、贛江が鄱陽湖に流入する河口にあり、清代は南昌府新建縣に属していた。

これらの三鎮と並ぶのが河口鎮であった。さらに同報告の「各市場情況」に、

廣信府 府城ヲ距ル西方七十清里ノ地ヲ河口鎮ト為ス。人口約八萬、其物産トシテ連泗紙ニシテ年額百余萬元ニ上ル。<sup>(8)</sup>

と、廣信府の河口鎮があった。

江西省の東部に位置し信江に瀕する河口鎮は、清代においては廣信府鉛山縣に属している。これまで河口鎮に関して、若干の研究があるのみで、日本でもほとんど注目されることはなかった。<sup>(9)</sup>

河口鎮が大いに発展したのは武夷山麓産の茶葉の集荷地として江西省内の水運を利用して広東省に輸送されていたことと深く関係する。普通に考えれば武夷山麓産の茶葉は、武夷山の南麓から陽溪、

建溪、閩江等の水運を利用して福州に集荷し沿海航運を利用して広州に輸送するのが便利と考えるが、清朝はそれを南京条約締結後の五港開港まで許可せず、江西省經由の輸送を強いたのであった。

清代において江西省經由の経路で福建から広州までは五〇日から六〇日を要した。五港開港以降は、内河水運で福州までは春は四日、秋ならば八日であり、さらに沿海航運を利用すれば広州までは一四、一五日程であったとされる。<sup>(10)</sup>内河水運輸送の一起点であった河口鎮は武夷山脈山麓で生産される茶葉の一大集荷地となっていたのである。

一九一一年の上海東亜同文書院の実地調査報告によれば、河口鎮は名は鎮名なれども大型民船上航の終点に位し上下貨物の積替地にして、又福建、浙江方面との交通の要衝なるを以て、往時は商業頗る殷盛を極め、呉城鎮、景德鎮と共に江西の三鎮と称せられたりしも、一度長江に汽船通じてより以来、本省西部南部一帯の取引は長江筋の奪ふところとなり、為に漸次衰微して今や昔日の面影なし、然れども、前述の如く福建、浙江方面の交通の要路なるを以て、現在も尚商業上有力なる地位を全然失ひたるものと云ふべからず。<sup>(11)</sup>

とあるように、河口鎮は長江に汽船航行する以前の帆船航行の盛時において多に繁栄していたのである。河口鎮が属する上級府廣信府の地方志である同治『廣信府志』卷一之一、疆域に、「河口鎮、三十里距府城（廣信府）、計水程八十里<sup>(12)</sup>」とあり、河口鎮は府城のある

廣信府より水路三十里の距離にあった。同箇所には注があり、

江浙閩粵商販叢集、船隻暫泊。<sup>(13)</sup>

とあり、河口鎮には江蘇、浙江、福建、広東からの商人が参集し船舶の寄港する地でもあった。このことは、同治『鉛山縣志』卷三、地理、津梁の福惠河に、

福惠河、在縣治二十五都、即河鎮之小河。（中略）嘉慶十九年同知彭昌運勸捐修復、改名福惠河。（下略）<sup>(14)</sup>

とあり、河口鎮の小河であった福惠河は、嘉慶十九年（一八一四）に鉛山縣同知の彭昌運の主導により修復され新たに福惠河と名付けられたのである。この彭昌運が記した記録に河口鎮の状況を端的に表現している。同治『鉛山縣志』卷三、地理、津梁の福惠河の条に附された「彭昌運記」に、

河口居信江之西南隅、日中為市、懋遷者皆資水利、舟楫帆檣、信水既通之。<sup>(15)</sup>

とある。これは嘉慶十九年当時に鉛山縣同知であった彭昌運が記したものであることを確認した上で、この記事からも十九世紀前半の河口鎮の繁栄は信江の水運による帆船航運と極めて密接な関係があったことが知られるのである。

乾隆八年刊『鉛山縣志』卷一、地理、疆域、鎮に、

河口鎮、縣西三十里、即古沙灣市也。當信河・鉛河二水交會之衝、在汭口九陽石之上、商賈往來、貨物貯聚、隱然為縣西之保障。明萬曆間、石佛寨巡檢司何清奉文駐節河口。今仍之。按河

口之盛、由来旧矣。(中略)貨聚八閩川廣、語雜兩浙淮揚、舟楫夜泊、繞岸燈輝。<sup>16)</sup>

とあり、河口鎮は古くは沙湾市と呼称されていた。また 乾隆四十九年刊『鉛山縣志』卷二、都鄙、市鎮に、

河口鎮、縣西三十里、即古沙湾市也。當信河・鉛河二水交會之衝、在汭口九陽石之上、商賈往來、貨物貯聚、隱然為縣西之保障。明萬曆間、石佛寨巡檢司何清奉文駐劄。乾隆四十年、改駐湖坊、移軍糧分府駐劄於此。<sup>17)</sup>

とある。さらに同治『鉛山縣志』卷二、地理、疆域、鎮に、

河口鎮、縣北三十里、即古沙湾市也。當信河・鉛河二水交會之衝、在汭口九陽石之上、商賈往來、貨物充物、為阜通利用之取。明萬曆間、石佛寨巡檢司何清奉文駐劄。乾隆四十年、改駐湖坊、移軍糧分府駐劄於此。<sup>18)</sup>

とあるように、河口鎮は信河と鉛河が合流する水運に便利な地であったため、各地から商人のみならず、多くの物資が集散する地となっていた。このため明代の萬曆年間には巡檢司が、清代の乾隆四十年(一七七五)には駐防官が駐在することになったのである。

河口鎮は旧名沙湾市と呼称されていたとあるが、これに関して若干触れてみたい。

明代の嘉靖『鉛山縣志』卷三、圖籍、鎮には、圖口鎮と紫溪鎮<sup>19)</sup>の二鎮の記述はあるものの沙湾市はむろん河口鎮の記述は見られない。康熙二十二年刊『廣信府志』卷三、地輿志、坊郷の鉛山縣の郷の

条に、

沙湾市 縣西三十里。<sup>20)</sup>

とある。さらに康熙二十二年『鉛山縣志』卷一、疆域、市に、

沙湾市 縣西三十里、即河口。當信河・鉛山<sup>17)</sup>二水交會之衝、汭口・九陽石之上、舟楫湊泊、商賈往來、貨物貯聚、隱然為縣西之保障也。荷為八閩孔道、商賈貿遷、絡繹不絕。今路由仙霞、市堰蕭條、大非昔日矣。<sup>21)</sup>

とあり、河口鎮は古く沙湾市と呼称され信河、鉛河の合流する地に近く舟運に適していたため商船や商人、貨物が多く参集する地となっていた。しかし福建省と浙江省を結ぶ浙江省衢州府江山縣の仙霞関が開かれると、その繁栄が減退したとしている。さらに同條に關する編者の注釈に、

傳曰、時地盛衰、豈不以数哉。石塘・河口鉛二鎮也。石塘以造纸為業、河口為八閩孔道、賈客貿遷、貨物舖陳、昔之市鎮頗豊、而近少替矣。(中略)河口原恃閩貨為生涯、近因取道仙霞、遂分河口、今來者、皆肩挑小販、與撥淺小舫、歇店有人、而牙行掣肘、舖舍有名、而貿易無美。一值公務、如取船採買之属、不至僱貼数金、牽連数百家不止。又閩中遷民、去住不測、每難防範。嗚呼二鎮、盛衰之理、大概見矣。<sup>22)</sup>

とある。康熙二〇年代には鉛山縣の石塘鎮と河口鎮は同縣を代表する市鎮となっていた。石塘鎮は造纸業で河口鎮は福建と結ぶ商業市鎮として発展していた。

これらの記述から河口鎮は清代において沙灣市として興起し、康熙年間に河口鎮としての名が広く知られるようになったことが判る。乾隆四十八年刊『廣信府志』巻、地理、疆域の信江の条に、  
信江一道、水路。(中略)至河口鎮三十里、距府城計水程八十里。<sup>(23)</sup>

とあり、同条の割り注に、

江浙閩粵商販、叢集茶葉・煙・笋各貨、聚集大小船隻亦多停泊<sup>(24)</sup>とあり、江蘇、浙江、福建、広東の商人が参集し茶葉やタバコやタケノコ等の貨物が集荷し、このため大小多くの船舶が沿江に停泊する状況であった。

同治『廣信府志』巻一之二、地理、物産に、

今建安之茶、多取道鉛之河口鎮、而銘実無佳茗。<sup>(25)</sup>

とあるように、福建省建寧府の建安縣で生産された茶葉は武夷茶と同様に河口鎮に輸送されていたように、河口鎮には多くの物資が集荷されていた。

同治『鉛山縣志』巻六、建置、公廨に、

湖坊巡檢司在石佛寨、萬曆間移駐河口、国初仍之、至乾隆三十二年、奉文改駐今地。<sup>(26)</sup>

とあり、さらに同書、巻六、建置、河口公署に、

分防同知署在河口一堡官山沿、乾隆三十九年奉文建。<sup>(27)</sup>

とあるように、湖坊巡檢司は石佛寨にあったのを乾隆三十六年(一七七二)に奉文によって河口鎮に移駐され、さらに奉文によって乾

隆三十九年(一七七四)には分防同知署が立てられている。この駐防官署の設置は河口鎮の盛況に伴って多くの人々が参集することの防備のためであることは明らかであろう。

雍正十二年(一七三五)三月初一日付けの署理江南總督印務趙弘恩の奏摺に、

廣信府界、連閩浙安徽三省、而廣信・鉛山二營、僅共官兵七百八十餘員名、分防一府七縣、似覺汎廣兵單。<sup>(28)</sup>

とあるように、廣信府は福建省と浙江省と安徽省と接する重要な地域にあるのにもかかわらず、廣信と鉛山の二箇所に兵營があるのみで、全員で七八〇余名の人員で一府七縣の広い地域を管轄するという状況であった。その傾向は十八年後においても防備の状況に大きな変化が見られなかったことは次の奏摺からも知られる。

乾隆十八年(一七五三)五月十一日付けの署兩江總督江西巡撫の鄂容安の奏摺に、

鉛山營河口汛、離營三十里、該地與閩省之崇安縣連界、為水陸往來要道、原防外委把總不足資彈壓、且防兵十名、巡察難周。(中略)河口地方實屬水陸衝要、原設弁兵勢力單薄、難資防範。<sup>(29)</sup>

とある。

乾隆五十六年(一七九一)の和珅等の題本にも、

廣信府河口鎮：該鎮地當衝要、五方雜處、分防彈壓、非精明強幹之員、不克勝。<sup>(30)</sup>

とあり、河口鎮に対する防備の必要性は喚起されているように、河

口鎮は福建の崇安縣と結ぶ水陸の重要な要衝にあるため、その繁忙がさらに進展しているのかかわらず防備の状況は極めて手薄であったことはこの記述からも明らかである。

河口鎮の防衛上の重要性は嘉慶年間においても同様であった。嘉慶十年（一八〇五）十月初二日付けの慶桂等の題本にも

廣信府同知分防河口鎮、地當衝要、五方雜處、係衝繁難、三項相兼要缺、非精明強幹之員、不克勝任。<sup>(31)</sup>

とあり、河口鎮は「衝・繁・難」の三項、即ち交通の要衝であり、商業市場として繁忙の地であり、多くの様々な人々が集散する地として防備上難しい地として言われている。

なお石佛寨は、同治『鉛山縣志』卷二、地理、疆域、寨に

石佛寨縣治西南九十里、山高地峻、洞如峽口、接邵武府光澤界、山澗中有怪石、如佛因名。（中略）萬曆間遷立河口、乾隆四十年仍遷湖坊。<sup>(32)</sup>

とあり石佛寨は武夷山脈中にあり、現在の武夷山市に当たる清代の崇安縣の南西部に隣接する邵武府光澤縣との県境に設けられていた。

同治『鉛山縣志』卷二、地理、疆域、鎮の按語によれば、

按河口之盛、由来舊矣。貨聚八閩川廣、語雜兩浙淮揚、舟楫夜泊、繞岸燈輝、市井晨炊、沿江霧布、斯鎮勝事。<sup>(33)</sup>

とあり、河口鎮の隆盛は福建や四川、湖南、湖北の貨物が参集してきたことによる。このため兩浙、兩淮、揚州などの言語が入り混じり、船舶が夜に停泊している状況は、舟の灯りが川岸を照らしてい

ると見られた。また町の朝餉のための炊事の煙は川筋を霧が帯のように覆っていたとある。この状況が河口鎮の盛況を物語っていると見える。

さらに河口鎮の盛況振りは、同治『鉛山縣志』卷七、建置、附各會館に、

全福會館 在河口一堡。乾隆二十四年、建。道光二十四年、燬。（中略）重建。同治十一年、（中略）重修。

永春會館 在河口三堡小河沿。嘉慶九年、重建。（下略）

山陝會館 在河口一堡後街。道光三年、山陝客商重修。（下略）

旌德會館 在河口三堡小河沿。嘉慶七年、閩邑士商倡建。咸豐

間被焚燬。同治九年復重建。（下略）

浙江會館 在河口三堡。乾隆三十八年、重修。（下略）

南昌會館 在河口三堡。嘉慶二年（中略）重建。

建昌會館 在河口四堡。乾隆十四年、（中略）建。（中略）嘉慶十二年（中略）重修。

徽州會館 即文公祠、在河口三堡鄭家街。新安士商公建。

昭武會館 在河口三堡。道光三年（中略）重修。

贛州會館 在河口一堡。嘉慶十五年（中略）建。道光二十四年

被火焚燬、合郡士商重建。（下略）

吉安會館 在河口一堡。道光二十五年、同邑諸人倡募重建。（下

略）

臨江會館 在河口三堡。道光二十六年、閩郡士商倡募重建。（下

略)

貴溪會館 在河口三堡。咸豐十一年、被粵匪焚燬遺址尚存。

公輸子祠 在河口三堡。程公祠前。

中州公所 在河口三堡油麻灘。

瑞州會館 在河口三堡小碼頭大街。(下略)<sup>34)</sup>

とあるように、創建、重建の年代が明らかかなもので最も早いものは乾隆十四年(一七四九)に河口鎮が属する廣信府の南西部に隣接する建昌府出身者によって建築された建昌會館である。それに次ぐのが福建省出身者が創建した乾隆二十四年(一七五九)の全福會館がある。乾隆三十八年(一七七三)重修の浙江會館、嘉慶七年(一八〇二)重建の江西省都の出身者による南昌會館、同年重修の安徽省寧国府旌德出身者による旌德會館がある。ちなみに旌德は徽州府の北に隣接する縣である。嘉慶九年(一八〇四)重建の福建南西部の出身者による永春會館、嘉慶十五年(一八一〇)に創建された江西省南西部の出身者の贛州會館、道光三年(一八二三)重修の山西商人、陝西商人による山陝會館、同年重修の福建邵武府の昭武會館などが知られる。この内、公輸子祠は詳細が明らかでは無いが、山西省の晋祠に公輸子祠があることを奈良行博氏が指摘されている。奈良氏によれば晋祠の公輸子祠は「職業神を祀る珍しい祠だが、『晋祠志』は、晋祠宮繕の工匠たちが自らのために造ったものだろうという<sup>35)</sup>」ことから、河口鎮の公輸子祠も何らかの工匠の職業會館の機能を持っていたものと考えられる。

周知のように會館、公所は「此會館公所こそ支那商人ヲシテ團結ヲ堅クシ信義ヲタモタシムル唯一ノ機關ナレ」と指摘されるまでもなく中国の商人にとって重要な機関で合った。河口鎮には、これら一四の會館と一公所及び一祠の計十六も設けられていたことから、河口鎮の商業市鎮としての盛況の一端を垣間見ることができよう。

信江下流域より河口鎮までは川幅が広く水路として水量も多いが、さらに浙江省に向かって信江を遡航するには大型帆船では困難であったことは東亜同文書院の調査でも知られる。

明代の路程書である『天下水陸路程』巻七、四 江西城由廣信府過玉山至浙江水には、

江西至玉山水緩、夜有小賊、可防、無風浪之險。鉛山河口之上、灘多水少、船不宜重。<sup>37)</sup>

とあるように、鉛山縣河口鎮より下流域が大型帆船の水運に適した流域であったことが知られる。

一七九三年(乾隆五八)にイギリス国王ジョージ三世の全權大使として乾隆帝に謁見したジョージ・マカートニーが帰路に際して浙江省から江西省を経て広東省広州に至るが、その際に河口鎮を通過している。そこで浙江省の常山から江西省の玉山に至り水路を利用した。この間の行程を坂野正高氏の訳を借りて記してみたい。

「一七九三年一月二日(木曜日) 午前十時に陸路の旅に出発した。そして中途の浙江省と江西省の境界線の標識となっている

建物で食事をした。次いで、二十四マイルの全行程を九時間以下で旅して、ここ玉山縣到着した。旅の方法は馬で行くか、屋根の付いた轎に乗るか、もしくは覆いのない轎によるかのいずれかであつて、一行の紳士諸君は自分の好む乗物を選ぶことができた。<sup>(38)</sup>

「十一月二十三日（土曜日）玉山縣を出発して河を下る。河は幅が八十ヤードあり、浅くて流れは速い。兩岸は絶壁をなして、岸にはこんもりと木が茂っている。<sup>(39)</sup>」

「十一月二十四日（日曜日）昨夜、われわれは船で旅をつづけたが、最近の雨のためにきわめて濃い煙霧が発生して、大氣一面に立ちこめたので、河は前に比べるとかなり幅も広くなり、水底も深くなつたにもかかわらず、航行はしばしば危険を伴つたゆである。船はたびたび暗礁に乗り上げ、またときには、突然、音響を立てて互いに衝突し合つた。<sup>(40)</sup>」

十一月二十四日「正午、われわれは河口鎮という大きく立派な村落で停止した。この村は水際につくられたもので、対岸にはパンチ・ボールを逆さにして並べたような風変わりな丘陵が連なつてゐる。丘は主として黒い岩石から成つていて、その割れ目からきわめて大きな樹木が何本か生えている。われわれはこれまでのより大きな船に乗り換え、今はこれで航行をつづけている。小さい方の船はたいへん乗り心地がよく、便利にできていたが、荷物をうまい具合に格納するのに十分なだけの場所がなかつたのである。<sup>(41)</sup>」

以上のマカートニーの日記からも明らかのように浙江省と江西省

の省境に水源を発する信江は玉山付近では河幅も狭く急流で、暗礁も多いが、鉛山縣の河口鎮に達すると流れも穏やかで水深も深く、河幅も広く大型帆船の航行に適していたことは明らかである。

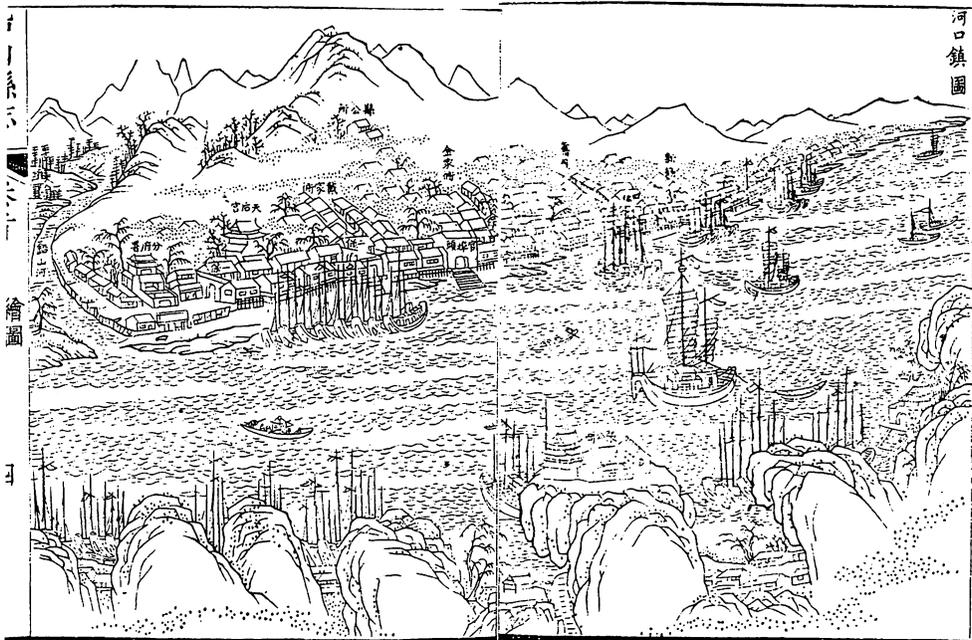
その後、信江は河口鎮よりさらに下流の貴溪、鷹潭を経て鄱陽湖に流入している。

河口鎮は内陸河川を利用する水運のとりわけ大型帆船を利用した航運の一終着点として物資の集散の起点と成つていた地理的状况は明らかであろう。このことは、Robert FortuneのA Journey to the Tea Countriesの記録にも見える。

Hokow又はHohow（河口鎮）として南中国で呼ばれる町は帝國におけるもっとも重要な内陸の町一つである。ここは北緯二九度五四分、東経一一六度一八分にあり、私が下つてきたKin-Keang河（信江）の左岸に位置している。この大きさから判断してまた他の町との比較から見ると人口は約三〇万人に等しいものと思われる。ここは紅茶貿易の最大の市場である。中国のあらゆる地から商人がここにやってくる。お茶を買うためとか、それを得て他の省の他の地域へ運搬するためである。

大きな宿舎、茶行や倉庫は町のいろんなところで見かけ、特に河岸に沿つてゐる。町に並行して停泊する舟はおびただしい数である。小型は一人用の客、公用の大型客船や官人の船ははでに旗で飾り立てられている。

これらのそばには茶や他の商品を東の鉛山や西の鄱陽湖に輸送



図① 「河口鎮圖」(乾隆四十九年『鉛山縣志』卷首, 會圖)  
乾隆四十九年『鉛山縣志』中国方志叢書, 華中地方第九一〇号, (一) 38~39頁。

するための輸送船がある。上海や蘇州が海に近い地であるのに対して、Hokow (河口鎮) は西の内陸地方にあるからである。<sup>(12)</sup>と記していることから、十九世紀後期の河口鎮の繁盛の状況が見取れるであろう。

信江流域の帆船について述べてみたい。『商賈便覽』卷二、各省船名様式に江西省の帆船名が見える。そこで、このうち信江流域の關係する船式名を列記すると以下のものがある。

刁子船、廣信人架多。其船大小不一。大的七八個倉、小的只四個倉。頭高艙尾、擡起如豎、高招牌樣。

丈陽魚船、似刁子、艙尾更尖、小畧矮些。

提划子、弋陽人架多、畧似刁子、艙更大些、尾豎矮些。

兩倉、小剝船、上饒・鉛山・玉山俱有、似弋陽魚船樣。

羅盪子、貴溪、安仁俱架、其船兩頭一樣、平極尖小、船大小不一。

とあり、江西省内河のうち信江流域で使用されていた帆船式であるが、これらの例からみて刁子船が最大のものであったと思われる。刁子船の大型船は船倉が七倉、八倉のものがあつたとされるから、おそらく河口鎮付近に來航し下流に向かつて下航していたのはこの刁子船であつたものと考えられる。河口鎮に停泊していた帆船の姿の一端は、乾隆四十九年『鉛山縣志』に見える「河口鎮圖」(図①)からも知られるであろう。

これに関して『支那省別全誌』には一九一〇年頃の調査では、

濟焉。<sup>(44)</sup>

とあり、官埠頭渡は他縣の出身である鄒隆先が義田を提供しその收穫により運営されていた渡船であった。

それでは、この河口鎮と福建省の武夷山市とを結ぶ陸路はどのようであったらうか。

### 三 崇安縣星村鎮より河口鎮への経路

①崇安縣星村鎮より河口鎮への経路

同治『廣信府志』卷一之二、地理、山川、碉堡に、

鉛山為八閩門戶、車馬之音、晝夜不息。<sup>(45)</sup>

とあるように、江西省の鉛山縣は福建省へ通ずる重要な陸路を有していた。

清代の路程書である『天下路程圖引』卷一、三一 南京由鉛山河口至福建路には、

鉛山縣、分水関、赤土舖、楊源舖、黃柏舖、渭墩舖、竹方橋、烏石街、分水嶺、黃連舖、大灣街、大安駅、南嶺、小將舖、楊家莊、姚嶺舖、沙灣、軍牙嶺、崇安縣。<sup>(46)</sup>

と分水関から各十里毎に駅舖があり、分水関から崇安縣まで計百八十里となる。ここでは南京から江西省の鉛山縣を経由して福建省の省都である福州へ至る経路が記されている。

左宗棠が同治五年十月に記した奏摺において、

閩省出產茶葉、先僅崇安縣屬之武彝山一帶、故有武彝茶之名、

河口鎮は又獅江とも云ふ、蓋し対岸に高さ六、七十尺の岩石屹立し其形状恰も獅子に似たるが故なり、古より商業盛に、錦江流域の中心地として夙に名あり、されど現今は長江に汽船を浮ぶるに至りしかば間接に之が影響を蒙り従来此地より貨物を閩粵地方に出だせしもの漸く減ぜり。碼頭凡て十六、中二個は対岸にあり、之を下流より数ふれば大王廟、建昌、蔣家、貴溪、撫州、新橋口、大橋口、馬四塢、五埠塢、巴家、大金家塢、小金家塢、官埠頭、天后宮とし、対岸に廟完、中洲の二あり、孰れも河口鎮と連絡すべき渡船の碼頭にして廟完碼頭は小なれども常に四、五隻の渡船碇泊す。(中略) 碼頭は切石にて造らる。此附近にてありては水深十尺、市街は河岸より高さこと十五尺乃至二十尺なり。<sup>(43)</sup>

とあり、乾隆四十九年『鉛山縣志』の「河口鎮圖」には埠頭名が見えないが、『支那省別全誌』の記録から、河口鎮側に十四の埠頭が、対岸に二箇所の埠頭があったことが判る。河口鎮附近での信江の水深は約3m、市街区は水面より数m高い位置にあつたとされるが、現状から見ても堤防は切石で護岸され『支那省別全誌』の記述とも一致する(写真④参照)。

この内、官埠頭渡に関しては乾隆四十九年刊『鉛山縣志』卷三、建置、津梁に、

官埠頭渡 在河口鎮。客籍鄒隆先、捐義渡置田三十畝、贍渡修船、立戸輸糧、嗣以要津、一舟接送維艱、復募增三舟、往來利

歷在該縣設官征稅放行。之后有再經過各関者、仍令照例輸稅。<sup>(47)</sup>  
と触れているように、崇安縣を代表する産物に武夷山一帯で生産される茶葉があり武夷茶として名を知られていた。

福建省側の武夷山南麓で生産された茶葉が江西省を経て広東省に搬出する行程に関しては『Chinese Repository』Vol. VIII, June, 1839, pp. 132-168 に掲載された「Description of the tea plant; its name; cultivation; mode of curing the leaves; transportation to Canton: sale and foreign consumption; endeavors to raise the shrub in other countries.」が参考になる。同書の翻訳が『支那叢報』第八卷に「茶樹綜説」として掲載されているのでそれによると、

福建及び江西に産する茶を広東へ輸送する交通路は、広東省北部の梅嶺越えの部分と産地の山岳地帯から船着場までの短い陸路とを除けば、盡く水路による。(中略)

茶は安全に包装された上に更に筵に包み、記号を附して先づ星村の部落に集まり、此處から貴溪の河口に運ばれる。貴溪は水源を武夷山中に発し、鄱陽湖に流れて行く河流である。而して茶の一部分は陸路によつて鄱陽湖東南の地方にある貨物集散地河口鎮まで運搬されるが、武夷山中の到る處から、単に貴溪のみならず、鄱陽湖に流れ入る幾多の小河流によつて茶が運び出されると言へるであろう。星村の部落から河口鎮までは二一〇里、更に湖を廻つて江西省の省都南昌府までは四九五里である。<sup>(48)</sup>とある。ここに見える星村とは現在福建省武夷山市に属している。

武夷山脈に水源を発する北溪河が武夷山市産の崇陽鎮付近で崇陽溪となり、さらに下流では建陽市で建溪となつて福建省の省都福州を経て海に到る閩江に流入するが、星村鎮は崇陽溪に流入する九曲溪に上流部に位置している。九曲溪は現在筏下りで多くの觀光客を集めている渓谷で、星村鎮は現在その筏下りの出発点になっている。<sup>(49)</sup>  
上記のように清代に広東から欧米諸国に輸出された福建省側の武夷山系で産出された茶葉は一端星村に集荷され陸路江西省の河口鎮まで輸送されていた。

このことは中国の研究でも「康熙初め、我が国の茶葉は欧州への輸出が開始され、茶がイギリス人の必需品となつた。嘉慶時期に、清朝廷は茶の海上により南に輸送することを禁じたので、安徽、福建等地の茶は江西鉛山縣河口鎮の茶市に集中することになり、河口鎮より信江に沿つて西にいたり、贛江に入つて、再び大庾嶺まで下り、人力を用いて担いで梅嶺関を越え、再び南雄より北江に沿つて広州に到り、十三行商人を経て輸出された。長途にわたる輸送は、商人にやはり利潤をもたらした。」<sup>(50)</sup>とされているように、安徽、福建の茶葉の広州までの輸送は清朝の政策と関係があつた。他方、イギリスでの茶需要の高揚とも関係した。一七三九年(乾隆四年)当時、イギリス東インド会社は *Bohea* と呼称された大量の武夷茶を購入している。<sup>(51)</sup>

なぜ武夷山産の茶葉が閩江水系によつて福州に輸送し海運で広東へ運ばずに、江西省の内陸河川を利用して広東に到つたのかは、清

朝の政策と関係した。嘉慶二十二年（一八一七）に両廣総督の蔣攸銛の奏称に、

福建之武彝茶、及由安徽入浙江之松羅茶、為西洋夷人必需之物、而各夷中、又惟英吉利銷售更多、從前商人悉由江西內地販売(52)來粵。

と述べているように、福建武夷山の茶葉は江西省を経て広東に輸送するように定められていたのである。

嘉慶二十二年七月二十六日内閣奉上諭、蔣攸銛奏請嚴禁茶葉海運一摺、閩皖商人販運武彝、松羅茶葉赴粵省銷售、向由内河行走(53)。

とあるように、蔣攸銛奏請の福建茶の海運による福建から広東への輸送を嚴禁し、江西省を経て内陸河川で輸送することを確認する嘉慶帝の上諭は嘉慶二十二年（一八一七）七月二十六日のものであった。

しかし、内陸輸送より海上輸送の方が遙かに便利であるため、海上輸送が秘密裏に行われていたことは、福建浙江總督董教増の奏請からも知られる。

嘉慶二十四年十二月十八日奉上諭、董教増奏、閩省廈門洋船請仍販運茶葉一摺、所奏甚屬非。是前此閩浙等省販粵茶葉、多由海道運往、經蔣攸銛以洋面遼闊、漫無稽查、恐有違禁夾帶等弊、奏請仍照舊例、改由内河行走、業經明降諭旨、通行飭禁(54)。

とあるように、嘉慶二十四年（一八一九）において再度内陸輸送を

確認している。

しかし、茶葉の沿海輸送は、道光元年（一八二一）五月二十八日の上諭においても、

江海關出口茶船與閩廣浙之船、可以利涉深洋者不同。：凡北赴山東・天津・奉天等處茶船、仍准其納稅放行。其向由内河行走輸稅者、照舊禁止出洋(55)。

とあるように、福建、広東、浙江の船による茶葉の南への沿海輸送は禁止が確認されている。

#### ② 崇安縣星村鎮における茶葉の集荷

武夷山における茶葉の生産に関して、嘉慶十三年（一八〇八）の『崇安縣志』卷二、物産、貨属、武夷茶に、

山中土氣宜茶、環九曲之内、不下數百家、皆以種茶為業、歲所産數十萬觔、水浮陸轉、鬻之四方、而夷茗甲於海内矣(56)。

とあるように、武夷山市の九曲溪附近では茶葉の生産に適し生産者が數百家あった。生産された茶葉は各地に搬出されたのであった。

嘉慶『崇安縣志』卷一、風俗に、

星村茶市、五方雜處、物價昂貴、習尚奢淫、奴隸皆執袴、執事江西及汀州人為多、漳泉亦間有之。初春時、篋盈於山、擔屬於路、牙行佛宇、幾欲塞破、五月後、各齋餘粟、聚賭宿娼、轉瞬成空飢寒、竝至風竊狗偷、往往而有甚有、白晝攫金、聚嘯巖穴、不可不預防也(57)。

とあり、崇安縣の星村における茶市は各地から人々が参集したが、

特に江西省から、また江西省の瑞金と省境を接する福建省中西部の汀州などの人々が多数を占めていた。ついで漳州や泉州府からの人々が多かつた。旧暦の初春の頃には道々に茶葉を運搬する籠などで溢れ、取り引きのための牙行なども多く見られた。その結果、五月頃には金を得た人々が賭博に興じ、娼妓を相手とするなど風紀が乱れる状況が現出したとされたのである。

このように、武夷茶の産出によって、崇安縣星村で開催される茶市のために毎年恒例的な社会風俗の変調を来していたのである。

武夷茶は宋代より生産されていたが、清代中期の嘉慶時期十九世紀前半には全国のみならず世界にも知られるようになる。武夷茶の賑わいは茶市に依拠したが、星渚即ち星村が最大であった。

嘉慶『崇安縣志』卷一、風俗にはさらに、

土産茶最多、烏梅・姜黄・竹紙次之、客商攜貲至者、絡繹不絶  
百萬、而民不富、蓋工作列肆、皆他方人、崇「安」所得者、地  
骨租而已。<sup>58</sup>

とされ、崇安にとり茶葉の生産が大きな産業であった。このため各地から商人が参集したが、地元には富が蓄積されず、工匠や商店も他地域の出身者で占有されている状況があった。

また崇安の茶葉の生産と輸送の変遷は、簡略ながら民国三二年（一九四二）の『崇安縣新志』卷十九、物産に見え、

清初、本縣茶市在下梅、星村。道、咸間、下梅廢而赤石興。紅  
茶、青茶向由山西客（俗謂之西客）至縣採辦、運赴閩外銷售。

乾、嘉間、銷於粵東。五口通商後、則由下府、潮州、廣州三幫  
至縣採辦、而轉售於福州、汕頭、香港。<sup>59</sup>

とあり、武夷山産の茶を目当てに山西商人が崇安まで来ていたことがわかる。彼等もおそらく山越えて江西省鉛山まで運ばせ、河口鎮から水運を利用して長江水系を利用して漢口経て陝西、甘肅方面から長城以北へと販運させたものと考えられる。乾隆嘉慶年間には主に山越えのルートで広東方面に搬出されていたが、五港開港以降は閩江水系を利用して福州から海上輸送され、広東省北東部の汕頭や香港方面に搬出されたのであった。

とりわけ星村における茶葉の集荷状況は、『支那省別全誌 第十四卷 福建省』第六編、第一章、福建茶に見える。

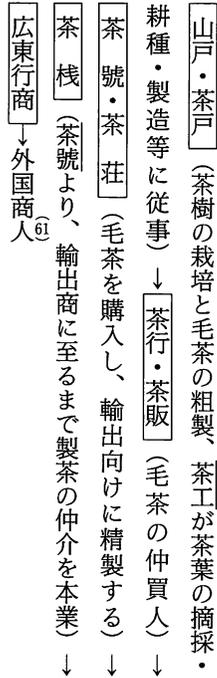
福建産茶の白眉たる武夷茶は実に崇安縣武夷山麓に産するものにして、其の山麓にある星村及び外城より十五支里を距る赤石街に於ては幾多の茶棧軒を列ね茶季に至る時は本地茶客の外、福州より来る茶商の買取所臨時に設置せられ、買集したる茶は手入れをなし包装して福州に下す、星村は単に一寒村に過ぎざるも而も廣大なる店舗を構へ、大規模の茶取引を行ふは全く茶業の余澤なりと云ふべし。

星村に集散する製茶の中、慧苑及び磊石産は良種にして天心馬頭に産するもの之れに次ぐ、其の主なる茶棧は永豊福、福茂新同泰榮、華記、春裕發、永順、炳記及永盛發等にして、各茶棧一箇年生産高五百箱乃至八百箱なり、一箱三十斤とし、四箱を

一擔とす、製茶費及び諸掛一擔八兩を要し、福州迄の運賃四兩を要すと云ふ。<sup>60</sup>

とあり、一九一〇年代の調査において星村で集荷されていた茶の量が知られる。この時は閩江水系によつて福州まで水運を利用して輸送されていた。しかし南京条約締結以前はこれに類する量が山越えて江西省鉛山河口鎮まで陸運されたのである。

茶葉の生産から広州までの輸出に關係した商人組織の概略図を『中国茶業問題』を参考にして述べてみたい。



これが、生産からの輸出までの商人組織の概略図である。

民国『崇安縣新志』卷六、礼俗、(二)風俗、一生活、四職業に、茶葉経営均操於下府・廣州・潮州三帮之手。(中略)栽茶・製茶・乾紙・撈紙・撐船・推車・抬轎、均江西人。<sup>62</sup>

とあり、民国時代になつてのことであろうが、崇安縣で茶葉生産の主力は廣州や潮州商人の配下の商人によつて行われ、茶葉の採集や茶葉加工の作業は江西省からの出稼ぎ労働者によつて行われていた

ことが知られる。

嘉慶年間のことであるが、広東省の商人が事実、崇安縣星村に茶葉を購入に來た事例が知られる。嘉慶十三年(一八〇八)八月二十四日付けの福建巡撫の張師誠の題本に、

廣東客人僧寧隱等、由原籍至永安小桃地方、雇劉昌林船隻、裝載行李銀兩、往崇安星村買茶。於嘉慶十三年三月二十五晚、船泊建安長坪村河辺、被盜行劫。：失 共值紋銀一千六百六十四兩四錢六分、：

とある。この事件の内容は、広東省から星村に茶を購入に來た商人が、永安縣の小桃で船を雇つて崇安縣星村に赴く途中の建安縣長坪村付近で盜賊に襲撃され千六百兩を奪われる被害を受けたとされるものである。この事例から広東商人が永安縣まで來て、同縣で傭船し沙溪を下り、現在の南平市に至り、ここから閩江上流部に当たる建溪とさらに九曲溪とを遡航して星村まで趣いて茶葉を購入しようとしていたことが知られる。

民国『崇安縣新志』卷六、同職業に、

娼妓一業、明以前無可考見。清初茶市漸興、娼妓亦隨之而至。

清末赤石一隅、多至七十餘家。(中略)此輩均贛籍、茶市一過、則風流雲散矣。<sup>64</sup>

とあるように、崇安縣の娼妓は茶市の勃興と密接な關係があつたとが知られる。清末の赤石には妓館が七十余家もあつたとされる。娼妓の多くは贛籍すなわち江西省出身者で占められ、茶市の季節的

な盛況がおさまると彼女達は帰郷する出稼ぎ娼妓であったことが判る。このことから崇安縣の賑わいは茶市の盛衰と多いに関係していたことが知られる。

同書、卷六、三歌謡に、茶に関する歌謡が収録されているが、

正月採茶是新年 二月採茶茶葉青 三月採茶發芽 四月採茶茶葉黃 五月採茶茶葉濃 六月採茶綠洋洋 七月採茶笑嘻嘻 八月採茶風涼 九月採茶是重陽 十月採茶是立冬 十一月採茶雨淋淋 十二月採茶雪飄飄<sup>(65)</sup>

とあり、崇安は一年中温暖な気候であるため茶樹に関する農作業の絶えることが無かったが最も繁忙な時期は、茶葉の採取期であった。

武夷の茶葉について、民国『崇安縣志』卷十九、物産、茶に、

武夷茶共分兩大類、一為紅茶、一為青茶、均非本山所產。本山所產為岩茶、岩茶雕鵬青茶之一種、然與普通青茶有別、其分類為奇種・名種・小種。至於烏龍水仙、雖亦出於本山、然近代始由建甌移植、非原種也。

とあるように、武夷の加工茶葉の古来からのものは青茶の中の岩茶であった。他の地域から移入されたものが多かった。これに関して、道光二十五年（一八四五）序の梁章鉅の『歸田瑣記』卷七、品茶、

余僑寓浦城、艱於得酒、而易於得茶。蓋浦城本與武夷接壤、即浦產亦未嘗不佳、而武焙法、實甲天下。浦茶之佳者、往往轉運至武夷加焙、而其味較勝、其價亦頓增。（中略）沿至近日、則武夷之茶、不脛而走四方。且粵東歲運、番舶通之外夷。（中略）武

夷九曲之末為星村、鬻茶者駢集交易於此。多有販他處所產、學其焙法、以贗充者、即武夷山下人亦不能辨也。<sup>(66)</sup>

とあるように、梁章鉅が崇安縣の北に隣接する浦城縣城に居住していた時のことであるが、浦城縣では酒よりも茶を入手することが簡単であった。浦城産の茶葉は良質であったが焙法は崇安縣の方が優れ全国に名を馳せていたのであった。このため浦城縣産の茶葉は崇安縣に流入して、崇安での焙法により加工され武夷茶として流通することになった。このような武夷茶は全国のみならず広州を経て外国に輸出されていた。武夷の九曲溪の位置する星村で開かれる茶市には多くに人々が参集し、また各地で生産された茶葉が同地に集荷され同地の優れた焙法によって加工されていた。その加工技術は武夷の人でも判別が困難とされるほどであった。この梁章鉅は一八世紀後半から一九世紀前半までの武夷山産の茶葉が盛んに広州から欧米諸国に向けて輸出されていた時期の記述であることを確認したい。

### ③武夷茶の河口鎮までの陸運状況

武夷山市の星村に集荷された茶葉が江西省河口鎮まで輸送される状況は、Samuel Ball の“Observations on the Expediency of opening Second Port in China, addressed to the President and Select Committee of Supracargoes for management of the Affairs of the Honourable East India Company in China”に見られる。

図② 「茶葉の輸送図」



「上質茶葉の輸送」



「粗製茶葉の輸送」

Robert Fortune, *A Journey to the Tea Countries of China; including Sung-lo and the Bohea Hills; with a short notice of the East India Company's tea plantations in the Himalaya Mountains*, 1852, Mildmay Books, London, 1987, pp. 202-203.

ほとんど全ての紅茶は広東へ内陸行程によって輸送される。最初に武夷山の中腹に位置する星村の町で集荷され梱包されると、同地から筏によって崇安縣に輸送されるが、筏にはおのおの十二箱が積載される。それは山越えは担ぎ人夫によって運ばれるが、鉛山縣までの経費のかかる行程であり、この旅程は平均して八日を要するのである。

鉛山縣から河口鎮まで小舟で輸送するが、各々二十二箱を収容できる。河口鎮において大型帆船に積載し輸送するが、それは贛州府まで運ばれる。これらの船によりおおよそ二百箱が運ばれると言われる。しかし、贛州府の町に接近すると淺瀬が多いとあるように、星村から筏で河を下り崇安に運ばれ、崇安から鉛山縣までおおよそ八日かけて人力で運搬していたのである。

どの様な様子で崇安縣から鉛山縣まで運送されていたのかは、既に波多野善大氏が紹介されている<sup>(68)</sup>。Robert Fortune, *A Journey to the Tea Countries* に二種の輸送形態の図があるので掲げてみた。

茶箱には「君眉」の漢字が見えるが、武夷山の著名な茶葉である「壽眉」の誤写であろうか。同書の記述には、

クーリーたちはたくさん居て、お茶の箱をかついでいた。彼らの多くは箱を一箱だけ運んでいた。私が説明したのは上級のお茶で、その茶箱は旅の間、地面に接触することは許されなかった。したがってこれらの茶は通常、粗製茶よりはるかに良い状態で目的地に到着する。一箱を運ぶ場合は以下の方法で運ばれ

ている。2本の竹をそれぞれ七フィートほどあり、両端を堅く結びつけ（別の）両端を箱に固定する。反対側に三角形をつくるように二本の端を結ぶ。これによってクーリーがこの箱を運ぶときに肩に載せて運ぶことが出来る。頭を竹で作った三角形の中心になるように入れて肩にのせて運ぶことができるようになる。小さな木の片は箱の下に結びつけられ、その肩に載せるときに、容易にシートとなるようになる。次のスケッチ(図②)はどのような表現よりも興味深い様式よりも分かり易いイメージを与えてくれるであろう。運んでいるクーリーがこのような形で休みたいと思つた時は、地面の上に竹の端を付けて竹を垂直に持ち上げる。力をかけることなくこの状態を保つことができる。

このやり方は山道とか険しい道を行くときに便利である。なぜならクーリーは休みなしで一定の時間に数ヤードしか運べないからである。そしてもし、ここで示したようなやりかたが無かつたら荷物は頻繁に地面の上に降ろさなければならなかつたであろう。宿屋や茶館などで休息するときは、この箱を壁に向かつて立てかけ、竹の端を上置いてある。

安価な茶はすべて通常の方法で運ばれた。つまり一人のクーリーが肩の上に竹をわたらせ二つの箱を運ぶ、その両側に一つずつ箱をつるしている。彼らが休むときは路上であれ宿であれ、いつでもその箱を地面の上に降ろすので、その結果として箱は

汚れて、上記の方法で運ぶよりもいい状態で目的地に着くことは無かつた。

と、上級茶と粗製茶はこのような方法で崇安縣から鉛山縣の河口鎮まで陸上輸送されていた。

この経路は、茶の輸送だけでなく、江西省からの物産を福建にもたらず経路でもあつた。その事例を示す例が次の史料である。嘉慶十三年（一八〇八）十二月二十一日付けの福建浙江總督の阿林保の題本によれば、

崇安縣通詳、永春州客民黃滂與林保合夥、往江西省販買磁器、於嘉慶十三年五月初十日、行至崇安縣轄南源山脚、被賊搶去銀番衣物、拒傷事主林保。：失 共值紋銀三千零九十一兩九錢四分、：失事處所、離崇安縣城三十五里、離南源嶺塘七里。：

とあり、福建省泉州の北西部にある德化窯で知られる永春州の人が共同出資の合夥形態によつて江西省に赴き磁器を購入しようとして紋銀等を持参して崇安縣から江西省を目指していた所、崇安縣城から三十五里の南源嶺塘付近で盜賊に襲われ所持金三千余兩を奪われたのみならず傷害を受けた事件であるが、彼らは江西省の磁器生産地景德鎮を目指し、崇安縣から分水関を経て河口鎮に至り、河口鎮で乗船し景德鎮に赴く予定であつたものと思われる。崇安縣・分水関・河口鎮の経路は重要な商業ルートであつた。

武夷山山麓で生産された茶葉が輸送された経路を確認するため、八月二七日、八時三十分には武夷山市を出発し、次第に山間部に入る

道路を進み九時過ぎには洋庄、九時半には大安を經過した(写真①参照)。十時には福建省と江西省の省境に当たる江西省分水関に到った。

民国『崇安縣志』卷十三、政治四、建設上、二交通の「本縣道路概要表」に、

「名称」崇分公路 「起訖点」由縣城起分水関止 「經過著名村鎮」洋莊・大安 「路長」三十八公里 「路幅」平地處七・五公尺、山路處四公尺 「土質」砂土、黄土 「迂廻及崎嶇之狀況」大安下五公里、及分水関附近、山岑崎嶇、路線蜿蜒、上坡亦較大 「橋梁及渡河点」大小橋梁共二十九坐。<sup>(71)</sup>

とあるように、崇安縣から分水関までの主要な村鎮は洋莊と大安であることは現在も変わりが無い。大安から分水関までの道路は「蜿蜒」と表現されているようにうねうねと屈曲している狀況は現在も同様である(写真①参照)。

福建省と江西省を分かつ分水関の地理狀況は、分水関東北の五虎崗の標高が一八九一m、西南の黃崗山が標高二一五八mある<sup>(72)</sup>ので分水関の標高は七〇〇、八〇〇m—一〇〇〇m近いものと思われる。行きも帰りも雲海の中と言う感じであった(写真②参照)。

分水関に関して、嘉靖『江西通志』卷十、廣信府、関梁に、

分水関 在鉛山縣治南八十里、由極峻阻。其水一派南流、入福建崇安溪、直抵于海。一派北流、抵于江、故名分水。有巡檢司、

為閩浙要関。<sup>(73)</sup>

とある。また嘉靖『鉛山縣志』卷六、関隘に、

分水関 去縣八十里、山脊峻阻、一水南流入海、一水北流入江、有巡檢司。<sup>(74)</sup>

とある。同治『鉛山縣志』卷二、地理、関には、

分水関、去縣東南八十里、其水一南流崇安。一北流鉛山、故名巖巒峻絶、為閩楚要衝、界接崇安。明正統間、閩寇作乱、於此設備、入関而西、車盤寨為関内要隘。<sup>(75)</sup>

とあるように、分水関はその名の通り、南は崇安縣即ち現在の武夷山市と接し、北は鉛山縣と武夷山脈を境に南北を分かつ地である。

明代の正統年間の閩寇とは正統十三年(一四四八)に起こった鄧茂七の反乱<sup>(76)</sup>のことである。鄧茂七の乱の際に、その勢力の一部は分水関を経て江西省へと勢力拡大を計ったのであった。分水関は歴史的な事件とも関係深い地であるが、武夷山市と江西省鉛山縣を結ぶ重要な交通の要衝であることは現在もかわりは無いことが確認される。

分水関を経て江西省に入った途端に道路が良くなった。「贛」即ち江西省のプレートナンバーを付けた大型トラックが頻りに行き交う。江西省側は比較的なだらかで、農村部の風景が日本の山間部の風景に類似しているように見える。十時五分に烏石を通過するが、その次の車盤について、先の同治『鉛山縣志』から見てみたい。

同治『鉛山縣志』卷二、地理、疆域、寨に

車盤寨、縣治南六十里、地名車盤、有神鹿黑色、每出風雨隨之。路接福建分水関界。宋淳熙間、設巡檢司。明洪武三年裁革後、

設驛。(中略) 順治己亥年奏裁。<sup>(7)</sup>

とあり、車盤寨は古く宋代の淳熙年間(一一七四—一一八九)に巡検司が設けられた歴史のある寨に由来する地である。

車盤を経て十時十一分に五星峰、十時四十五分稼軒、十時五十二分に永平、十一時五分鉛山県の標示を見つづける。そして十一時半には鉛山市の中心部の黄崗山大道に到着した(写真③参照)。市内で昼食を済ませ、十二時過ぎに鉛山市の中心部から比較的近い河口鎮に到着し、河口鎮の信江に面する碼頭(写真④参照)から対岸を見るが、対岸にはマカートニーの紀行日記にみる半円形の山が見え(写真⑤参照)しかも河幅が広く水量が多いことが一見できた。

#### ④ 河口鎮の現況

現在、河口鎮の信江碼頭には鉛山縣人民政府が一九九一年四月に設置した「河口防洪工程記」(写真⑩参照)が設けられている。同記の冒頭に次のようにある。

明初鉛河改道、匯信江于河口、両河航運日繁、河口遂成、貨聚八閩川廣、商賈雲屯雨集、之重鎮、然利興弊隨、河口地勢低洼、桃花水漲、漫街漫衢、幾不間年。…

とある。

河口鎮には明清街と称される人民中路があり、かつて明清街には二〇〇(三〇〇)の商店があり棉布やお茶、様々な商品を扱う店が一九四九年頃まで存在したが、現在は建築形式を保存して住居として使用されている(写真⑥、⑦参照)。

特徴的なのは一階部分が際だって高く四m程ある。殆どが同様の形式で建造されている。

新修の「鉛山縣志」によれば、河口鎮が商業市鎮として大いに盛況であった時期に、その取り扱った主要商品は、紙、茶葉、薬剤などであり、五港開港後に河口鎮は漸次衰退傾向になるが、それでも咸豊・同治年間においても江西省東北部の物資の集散地としての地位は揺るぎないものがあり、安徽人の朱少峰が朱大全と言う綢緞店を、湖北人が朱怡豊布店、安徽人が石中玉南貨店、豊城人が陳隆昌廣貨店、安徽人が汪同茂布店が、奉新人が長安市麵館を開業している。光緒年間(一八七五—一九〇八)には河口鎮には一九〇〇前後の商店があり、民国初年には二〇〇〇余家の商店があった。民国二三年(一九三四)には河口鎮の商店は三八三家に減少していた。一九四九年五月に鉛山縣は解放されるが、七月に鉛山縣の工商科の工商登記資料の記載によれば、河口鎮で経営をしているのは四七軒、かつて営業していたが現在は経営していない家が一〇九七家とされている。<sup>(8)</sup>

乾隆時代、河口鎮には茶問屋に当たる茶行、茶莊が四八家あり、いずれも河に臨んで建築されており、船に装載するのに便利な構造になっていた。これは茶行、茶莊の中でも饒、呂、郭、莊の四家が四大金剛と称せられた。河口鎮に集荷された茶葉は水運で北路は九江を経て武漢、漢口方面からモンゴル、ロシア方面に搬出され、南路は江西省内の水運と山越えの陸路によって広州と搬出された。<sup>(9)</sup>

大金剛の一とされる茶行、茶荘の一家と考えられる饒家の伝記が同治『鉛山縣志』卷十八、人物、善士、善挙に見える。

饒廷標、號養和、旌德人、國學生、幼隨父懋、遷河鎮遂家焉。

標席父資、家日益富、(中略)有李德全堂藥局、負標二千金、店事將敗、復貸千金、不敷。年又將敗、又貸數百金、以維持之。

有汪佩珍開設元有雜貨店、負廣客五萬、標亦被累五千、廣客控縣追索、時邑宰吳林光、呼佩珍來、將元有・元太二店、抵牾饒姓、已立契矣。…惟元太婦標、訟既結、標見佩珍、子身回里、心測然檢、還元太。…其他處積欠盈千累萬、標從未興訟、亦不索追、其待友也。<sup>80)</sup>

とあり、饒廷標の名が知られる。彼の本籍は旌徳と考えられることから徽州商人の範疇に入る父の代に河口鎮に移住してきた。父と彼の代に巨額の資産を蓄えることになり薬店や雜貨店に多額の資金を提供し、その資金の回収を計らず、さらに貸与する余裕があつたことが記されているが、この饒家の家業は記されていないものの、河口鎮の状況から考え茶行、茶荘であつたと考えられる。

このような巨額な資産を備蓄した茶行、茶荘を河口鎮は生み出したのである。

南京条約により上海が開港され、上海での茶貿易も可能になつた直後の道光二三、二四年(一八四三、一八四四)に、上海で茶葉を扱つた敦利號の記録に、鉛山縣河口鎮の茶商と見られるものに、李裕發、孚和号、天美号、協泰号、瑞蘭号、同興源記等の六家の名が

知られる。とりわけ天美号は道光二四年九月二六日に六三二箱を届けている。<sup>81)</sup>他の日の記録は数箱から数十箱であることから見て河口鎮茶商の集荷能力の高さが推測される。

河口鎮の明清街と呼称される人民中路の中心部に金利合薬店(写真⑧、⑨参照)がある。その建築の荘嚴さから、同店の張虹さんから聞くと、一九四九年解放前は何氏の薬店であつたが、現在は国营の薬店となつているとのことである。店内の建築様式(写真⑨、⑩参照)には旧時に巨額の建築費をかけたことが伺われる。

この金利合薬店に関して、新修の『鉛山縣志』に詳細に紹介されている。

金利合薬号始業于同治十一年(一八七二)。老板何柱成、豊城人、同治八年(一八六九)在河口森昌德薬号当学徒、三年満師、自立門戸。<sup>82)</sup>

とあるように、豊城縣人の何柱成が河口鎮にあつた森昌德薬店で修行をして三年後に独立して店を持つたのであつた。廣信七縣には多くの薬剤を産出するので何柱成はそれらを購入して南昌や薬剂市鎮として有名な樟樹鎮などで売却した。彼はさらに福建省北部まで薬剤の購入先を拡大し、光緒元年(一八七五)に盧清照と共同出資で金利合店を開店させている。さらにその分店を三堡街において開店させている。これが現在河口鎮の金利合店の建物である。さらに彼は樟樹鎮より薬剂製造職人を呼び寄せている。光緒十一年(一八八五)には吉慶合と名付けた分店を開店したが、光緒十二年(一八八

六)に盧清照と別れ、吉慶合は盧清照が、金利合は何柱成が経営することとなった。民国二四年(一九三五)六月時点での金利合の資産は、流動資金が二四万銀元、房屋が八棟、この内河口鎮に六棟があった。民国二六年(一九三七)の雇員は三〇名に達したのであった。<sup>(83)</sup>このような歴史を有する金利合薬店の建物(写真⑧)⑨参照)が現在も存在しているのである。

#### 四 小 結

上述のように、清代に廣州より欧米に向けて輸出された福建省の武夷茶葉の集荷から陸運によって山越えて江西省鉛山縣河口鎮まで輸送された経路及び河口鎮の歴史と現況について記したが、河口鎮は清代特に乾隆時代から嘉慶、道光時代にかけて繁栄した余韻が百数十年を経た現在でも垣間見ることが出来た。

かつて茶葉が丁寧によりて輸送された現在の武夷山市より河口鎮までの道路は、一部舗装の立派な道路があるが、まだ車が行き交うのがやっとと言えるような道路が多く、とりわけ福建省側の山間部を経て江西省へ至る道路の舗装率が低かった。ところが、内陸部の江西省は対外活動を行うのに特に物資の輸送、客運に関しては周辺の各省へ出ていく必要があるためか、道路の舗装率は高いと思われた。

清代において武夷山麓産の茶葉を山越えて江西省鉛山縣の河口鎮まで人力で輸送した経路は、現在江西省にとつて、逆に沿海部の福

建省に出るための貨物輸送や、客運のための重要な交通路の一つとなつていたのである。

今回の河口鎮への調査に当たり、廈門大学歴史研究所楊國楨教授、並びに廈門大学人文学院院长陳支平教授、福建省社会科学歴史研究所徐曉望研究員の御教示を得た。また河口鎮への調査に際しては、通訳として台北市文献委員会編纂の下鳳奎氏の協力を得た。諸氏のご協力に感謝する次第である。とりわけ楊國楨氏、徐曉望氏は、中国経済史の専門家として世界的に有名な廈門大学の教授であつた傅依凌教授等と一九八〇年代に河口鎮の調査を行なわれたとのことであつた。その際の成果の一端が『明清福建社会與鄉村經濟』であるとのことである。

1 波多野善大「中国近代工業史の研究」東洋史研究会、一九六一年五月、第二章「中国輸出茶の生産構造―アヘン戦争前における―」八六―一四四頁。

2 『中国交通營運里程図集 新世紀版』人民交通出版社、二〇〇一年四月、一一九、一二五、一二八頁参照。

3 松浦章「清代大黃の販路について」『関西大学東西学術研究所紀要』第二輯、一九九〇年三月、五〇頁。

4 『通商彙纂』明治四十一年第二号、明治四十一年一月十三日発行、六四―六五頁。

5 『宮中檔乾隆朝奏摺』第四十三輯、国立故宫博物院、一九八五年十一月、八〇二頁。

6 松浦章「清代大黃の販路について」『関西大学東西学術研究所紀要』第二

三輯、五〇頁。

蕭放「明清時代樟樹葉業發展初探」『中国社会經濟史研究』一九九〇年第一期（二月）六五〜七〇頁。

7 『宮中檔乾隆朝奏摺』第三十九輯、國立故宮博物院、一九八五年七月、三九〇頁。

8 『通商彙纂』明治四十一年第二号、六七頁。

9 徐曉望「河口考察記」『中国社会經濟史研究』一九八六年第二期、一〇〇〜一〇五頁。

徐曉望「明清閩浙贛邊区山区經濟發展的新趨勢」傅衣凌・楊國楨主編『明清福建社會與鄉村經濟』厦門大學出版社、一九八七年八月、一九三〜二二六頁。徐曉望「清代江西農村商品經濟的發展」『中国社会經濟史研究』一九九〇年第四期（二〇月）三〇〜四〇頁。

蕭放「論明清時期河口鎮的發展及其特点」『江西師範大學學報（哲學社會科學版）』一九八九年第三期（總五五期）、六一〜六七頁。

施由民「清代及近代河口鎮的茶葉貿易」『農業考古』一九九三年第二期、（總三〇期）、二〇四〜二〇七頁。

波多野善大「中国近代工業史の研究」第二章「中国輸出茶の生産構造―アヘン戦争前における―」において「広東への輸送」（一八〜二〇頁）において河口鎮の地名が見られる。

陳慈玉「近代中国茶業的發展與世界市場」現代經濟探討叢書、中央研究院經濟研究所、一九八二年一〇月、第二章、第一節、三茶產地至通商港的徑路、三八〜四一頁。若干触れられている。

10 波多野善大「中国近代工業史の研究」一一九頁。

11 『支那省別全誌第十一卷江西省』東亞同文會、一九一八年二月、一〇三〜一〇四頁。

12 同治『廣信府志』中国方志叢書、華中地方第一〇六号、成文出版社、（二）六一頁。

13 同治『廣信府志』（一）六一頁。

14 同治『鉛山縣志』中国方志叢書・華中地方・第九一一号、成文出版社、

（二）二八五頁。

15 同治『鉛山縣志』（二）二八五頁。

16 乾隆八年『鉛山縣志』中国方志叢書・華中地方・第九〇九号、成文出版社、（二）六七頁。

17 乾隆四十九年『鉛山縣志』中国方志叢書・華中地方・第九一〇号、成文出版社、（一）七〇頁。

18 同治『鉛山縣志』中国方志叢書・華中地方・第九一一号、成文出版社、（一）一三八頁。

19 嘉靖『鉛山縣志』天一閣藏明代方志選刊統編四六、六八頁。

20 康熙『廣信府志』中国方志叢書・華中地方・第九一八号、成文出版社、（二）二八二頁。

21 康熙『鉛山縣志』中国方志叢書・華中地方・第九〇八号、成文出版社、（一）四五頁。

22 康熙『鉛山縣志』（二）四五〜四七頁。

23 乾隆『廣信府志』中国方志叢書・華中地方・第九一九号、成文出版社、（一）二〇〜二二頁。

24 乾隆『廣信府志』（二）二二頁。

25 同治『廣信府志』（二）一一五頁。

26 同治『鉛山縣志』中国方志叢書・華中地方・第九一一号、成文出版社、（二）四四四頁。

27 同治『鉛山縣志』（二）四四四頁。

28 『宮中檔雍正朝奏摺』第二輯、國立故宮博物院、一九七九年八月、六七頁。

29 『宮中檔乾隆朝奏摺』第五輯、國立故宮博物院、一九八二年九月、三二六頁。

30 『明清檔案』A二六四・四一（五一）、一九九二年六月。

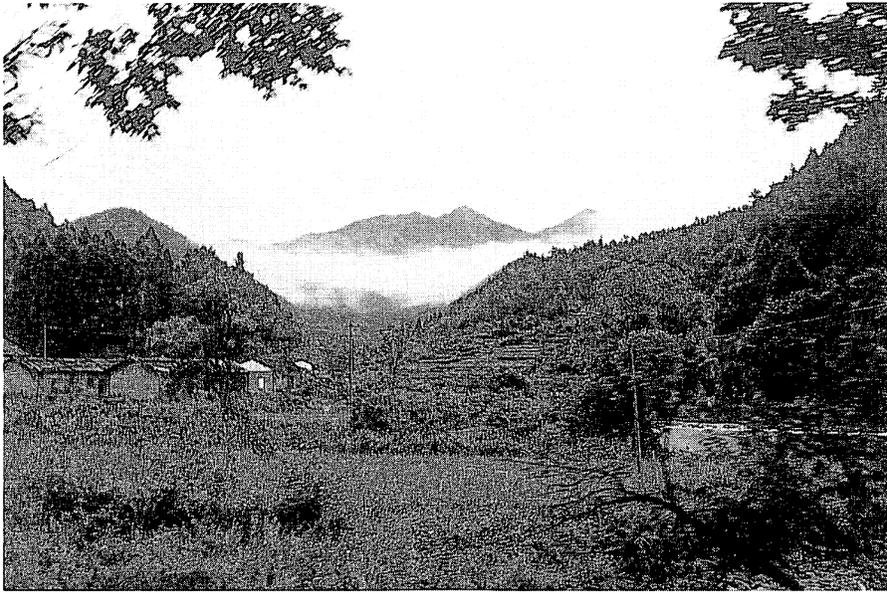
31 台北・中央研究院歷史語言研究所藏明清史料、登錄号二一五六四二。

32 同治『鉛山縣志』（二）一四五頁。

33 同治『鉛山縣志』（二）一三九頁。

- 34 同治『鉛山縣志』中国方志叢書・華中地方・第九一―一號、成文出版社、(一)五二三―五二五頁。
- 35 奈良行博『道教聖地―中国大陸踏査記録』平河出版社、一九九八年六月、八五頁、c.九。
- 36 『支那經濟全書』第二輯、東亜同文會、一九〇七年四月、五三九頁。
- 37 楊正泰校注『天下水陸路程・天下路程圖引・客商一覽醒迷』山西人民出版社、一九九二年九月、二〇三頁。
- 38 坂野正高訳注『中国訪問使節日記』平凡社東洋文庫二七七、一九七五年九月、一八〇―一八一頁。
- 39 『中国訪問使節日記』一八二頁。
- 40 『中国訪問使節日記』一八四頁。
- 41 『中国訪問使節日記』一八四頁。
- 42 Robert Fortune, A Journey to the Tea Countries of China; including Sung-lo and the Bohai Hills; with a short notice of the East India Company's tea plantations in the Himalaya Mountains, 1852, Midway Books, London, 1987, pp. 202~203.
- 43 『支那省別全誌』第十一卷 江西省 二五三―二五四頁。
- 44 乾隆四十九年刊『鉛山縣志』(一)二一一―二一二頁。
- 45 同治『廣信府志』(一)九四頁。
- 46 楊正泰校注『天下水陸路程・天下路程圖引・客商一覽醒迷』四〇五頁。左宗棠『閩省征收起運運銷茶稅銀兩未能定額情形摺』同治五年十月初八日、『左宗棠全集・奏稿』(三)岳麓書社、一九八九年九月、一五八頁。
- 48 『支那叢報』第八卷、丸善株式會社、一九四二年二月、二二四―二二五頁。
- 49 『福建省地圖集』福建省地圖出版社、一九九九年一〇月、五八―五九頁。『武夷山旅游圖』福建省地圖出版社、二〇〇〇年一月第一版第二次印刷、參照。
- 50 許濂新・吳承明主編『中国資本主義的萌芽』中国資本主義発達史第一卷、人民出版社、一九八五年三月、三三二頁。
- 51 H. B. Morse, The Chronicles of the East India Company trading to China 1635-1834, 1925, Vol. I, p. 268. 中国海関史研究中心組訳『東印度公司対華貿易編年史』(一六三五―一八三四年)第一、二卷、中山大学出版社、一九九一年十二月、二六八頁。
- 52 『粵海關志』卷十八、茶之禁。
- 53 『嘉慶道光兩朝上諭檔』第二十二冊、廣西師範大学出版社、二〇〇〇年十一月、二六一頁。
- 54 『仁宗實録』卷三二二、嘉慶二十二年七月戊辰(二十六日)条參照。
- 54 『嘉慶道光兩朝上諭檔』第二十四冊、六六四―六六五頁。
- 55 『嘉慶道光兩朝上諭檔』第二十六冊、二二〇頁。
- 56 嘉慶『崇安縣志』卷二、十五丁表、本書は上海圖書館所藏本(圖書番号五五一八二一三)によった。
- 57 嘉慶『崇安縣志』卷一、風俗、三丁裏―四丁表。
- 58 嘉慶『崇安縣志』卷一、風俗、三丁。
- 59 同治『崇安縣新志』中国方志叢書・華南地方・第二三八号、成文出版社(二)五〇九頁。
- 60 『支那省別全誌』第十四卷 福建省『東亜同文會、一九二〇年一月、四五八頁。
- 61 波多野善大『中国近代工業史の研究』では、山戸・茶莊(茶號)・行商があげられている(九七一―三三)。
- 62 吳覺農・范和鈞著『中国茶業問題』現代問題叢書、商務印書館、一九三七年、第六章茶業組織問題、第一節吾国茶業組織概況(二〇二頁)及び、同書第六章を翻訳した松崎芳郎訳『支那茶業の機構』茶業組合中央會議所、一九四〇年十一月、一―三〇頁及び同書の『現代支那茶用語解説』三三―三八頁を参考にした。
- 62 民国『崇安縣志』(一)一六二頁。
- 63 中央研究院歴史語言研究所藏明清史料、登錄号一二二九一九。
- 64 民国『崇安縣志』(一)一六二頁。
- 65 民国『崇安縣志』(一)一七一頁。

- 66 梁章鉅『歸田瑣記』清代史料筆記、中華書局、一九八一年八月第一版、一九九七年十二月第二次印刷、一四五～一四六頁。
- 67 Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland, vol. 6, pp. 214-215
- 68 波多野善大「中国輸出茶の生産構造―アヘン戦争前における―」『名古屋大学文学部研究論集Ⅱ(史学Ⅰ)』一九五二年三月、二〇二頁に「崇安から茶箱をかついで武夷山をこえ鉛山に運ぶ輸送人夫」としてFortuneの著書からの図を掲載されているが、同論文を収録された同氏の『中国近代工業史の研究』では同図は収録されていない。
- 69 Robert Fortune, A Journey to the Tea Countries of China; including Sung-lo and the Bohea Hills; with a short notice of the East India Company's tea plantations in the Himalaya Mountains, 1852, Miltid-may Books, London, 1987, pp. 202～203.
- 70 中央研究院歴史語言研究所藏明清史料、登録号一〇八五七七。
- 71 民国『崇安縣志』(一)二八七頁。
- 72 『江西省交通旅游地圖冊』中華地圖學社、二〇〇〇年九月、一一〇頁參照。
- 73 嘉靖『江西通志』(二)、『四庫全書存目叢書・史部一八二』莊嚴文化事業有限公司、一九九六年八月、四五二頁。
- 74 嘉靖『鉛山縣志』天一閣藏明代方志選刊統編四六、一二五頁。
- 75 同治『鉛山縣志』(一)一四一頁。
- 76 谷川道雄・森正夫編『中国民衆叛乱史? 宋～明中期』平凡社・東洋文庫三五一、一九七九年三月、西村元照訳注『明代中期の二大叛乱』三五五～三六〇、三六八～四〇八頁。
- 松浦章『武職選簿』に見る鄧茂七の乱』『滿族史研究通信』第六号、一九九七年三月、三二～三五頁。
- 77 同治『鉛山縣志』(一)一四五頁。
- 78 鉛山縣志編纂委員會『鉛山縣志』南海出版公司、一九九〇年九月、二八三頁。
- 79 鉛山縣志編纂委員會『鉛山縣志』二八〇頁。
- 80 同治『鉛山縣志』(四)一五四七～一五四八頁。
- 81 王慶成「開埠初期上海外資業的制度和概数―英国収蔵的敦利商棧等簿冊文書 考釈(下)」『近代史研究』一九九七年第二期(三月)、一七六～一九九頁。
- 82 鉛山縣志編纂委員會『鉛山縣志』二八一頁。
- 83 鉛山縣志編纂委員會『鉛山縣志』二八一頁。
- 【付記】中央研究院歴史語言研究所藏明清史料については中央研究院中山人文社会科学研究所湯熙勇氏より教示を得た、記して謝意を表する次第である。



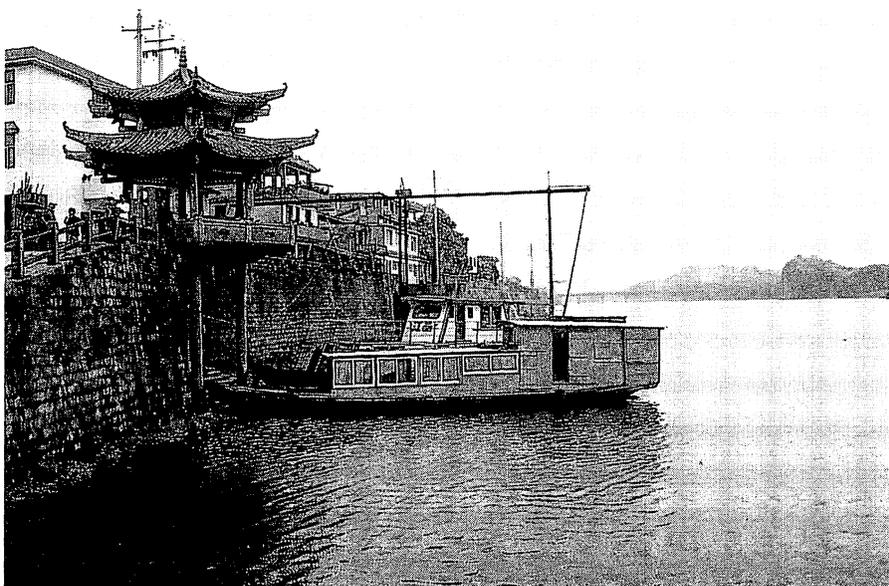
写真① 武夷山麓付近の風景



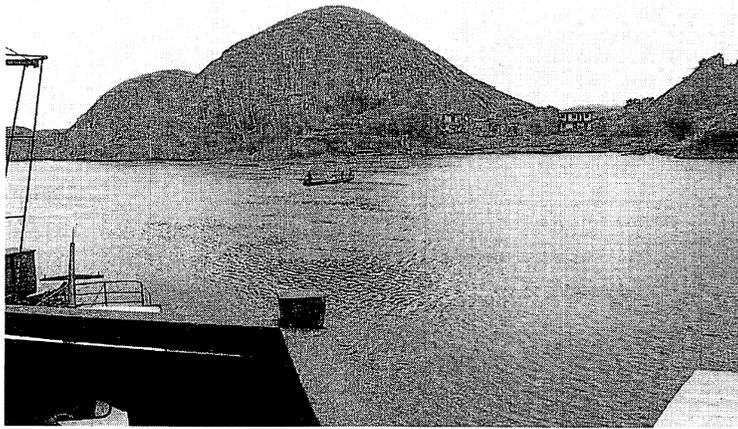
写真② 江西省・福建省の省境＝分水関



写真③ 鉛山縣市内



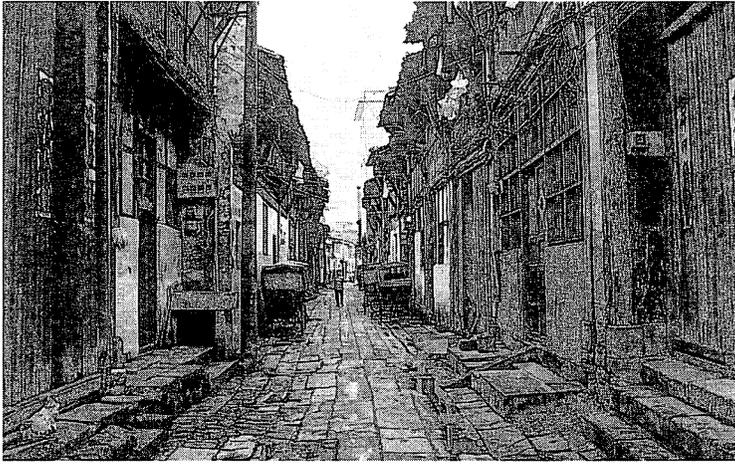
写真④ 鉛河埠頭



写真⑤ 鉛河と対岸



写真⑥ 河口鎮明清街



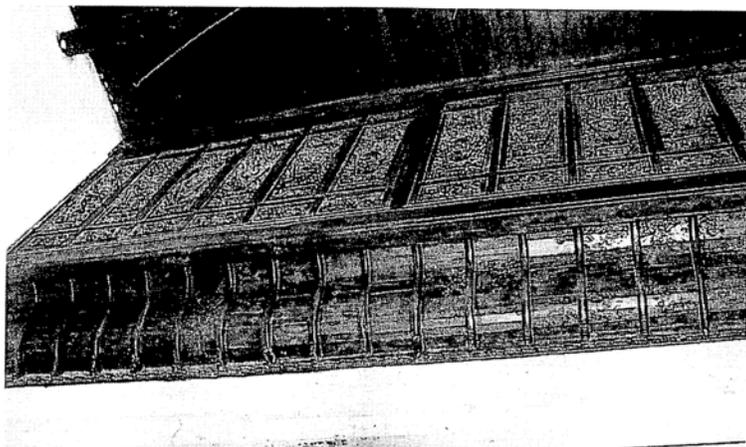
写真⑦ 河口鎮明清街



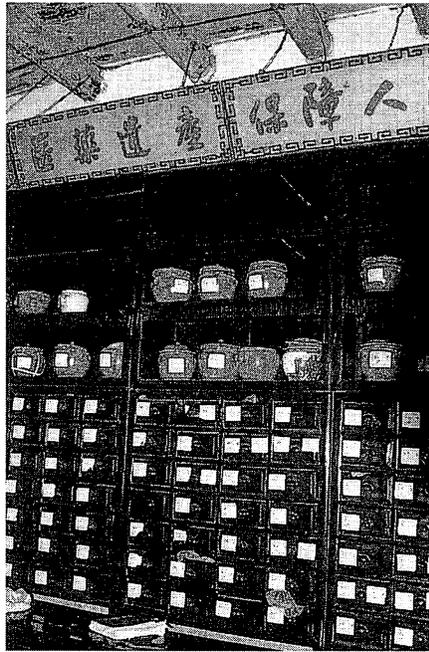
写真⑧ 河口鎮・金利合



写真⑨ 河口鎮・金利合入り口彫刻



写真⑩ 河口鎮・金利合内部の木彫



写真⑪ 河口鎮・金利合藥劑棚



写真⑫ 河口鎮・「河口防洪工程記」

# The Market of Hekou-zhen and Tea Trade in Qing Dynasty

Akira Matsuura

Since the 18th Century, tea leaves were one of the popular items of exports from Guangzhou to Europe and the US in Qing Era. One of the major production sites was the south side of Wuyi Shan Mountains, or the foothills in Fujian Province. The tea leaves produced there were transported by land over the mountains from Fujian Province to Jiangxi Province, headed for the provincial capital Nanchang from Hekou-zhen on Qianshan by water transport along Xin-jiang. Then using the water transport going upstream along Gan-jiang running north from Guangdong Province, they were sent to Nanan-fu, current Daiyu, in Jiangxi Province, then went over the mountains again via Meiguan to Nanxiong-zhou, current Nanxiong City, in Guangdong Province, and again by water transport reached Guangzhou, loaded into foreign vessels in Guangzhou and exported to other countries.

We planned a field work in Hekou-zhen in Qianshan-xian, to investigate the geographic situations and the current status of Hekou-zhen in Jiangxi Province, one of the cargo-pickup points of the Fujian tea leaves exported from Guangzhou to Europe and the US in Qing Era, and of a part of the transportation route from Wuyi Shan City to Hekou-zhen. We started Wuyi Shan City in Fujian Province by car and visited Hekou-zhen in Jiangxi Province on August 27, 2001. We could study the history and the current status of Hekou-zhen and of the pickup and the transportation by land over the mountains to Hekou-zhen in Qianshan in Jiangxi Province of the Wuyi Shan tea leaves from Fujian Province exported from Guangzhou to Europe and the US in Qing Era. The remainder of the prosperity of Hekou-zhen in Qing Era, especially in Quanlong, Jiaying, and Daoguang periods, is still seen after more than a hundred years.

In Qing Era, the tea leaves produced in Wuyi Shan were transported over the mountains by manpower to Hekou-zhen in Qianshan in Jiangxi Province. The route has become one of the important routes for cargo and passenger transportation from Jiangxi Province to get to Fujian Province by the sea.